

# 隋唐時代の文化

## 一 隋唐時代の大勢

後漢の滅亡以來、三百七十餘年の永きに亘つて分裂状態に陥つていた中國も、六世紀の末に北朝の系統を引く隋の文帝（五八一—六〇四年）が南朝の陳を滅ぼすに及んで再び統一されることになつた（五八九年）。文帝は樸實な北朝の制に則つて中央集權的國家體制の整備に努めたが、業半ばでその子晉王廣のために暗殺された。廣は有名な煬帝（ヨウダイ、六〇五—一七年）である。性豪華を好み、自ら漢の武帝に比した彼は、長安・洛陽二都の經營、長城の修築等、盛んに大土木工事を興したが、中でも、江南の穀倉地帯を中原に結びつけた有名な大運河の開鑿は、彼が門閥勢力の打破を目的として創始した、かの科擧の官吏登用制度と相並んで、その統一事業中、最も重要なものであつたと言つてよい。

かくて國內の統一を固める一方、煬帝はまた盛んに對外發展を企てた。即ち六世紀の中葉以來、東は興安嶺から西は中央アジアのアム河流域におよぶ空前の大遊牧帝國を建設して、最も恐るべき中國の強敵であつたトルコ族の突厥（トッケツ）が、東西に分裂する兆候を示したのに乘じ、これを離間したのを始めとして、西方では青海からタリム盆地の東南部に進出していたチベット系の吐谷渾（トヨクコン）を伐つて、西域の門戸を開き、南方では